

2024.02.15

としまコミュニティ大学 2月講座

ディケンズに見る ヴィクトリア朝英国のSDGs

ディケンズの『我らが共通の友』（1864-65）を通して
ヴィクトリア朝英国の「リサイクル社会」のありようを讀
み解きます。

川村学園女子大学
文学部 国際英語学科
菱田 信彦

ディケンズ『我らが共通の友』について

- ▶ チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-1870）：ヴィクトリア時代イギリスの小説家。中流階級だけでなく労働者階級の人々を主要登場人物として描き、弱者の視点から鋭い社会風刺を展開した。
- ▶ 『我らが共通の友』（*Our Mutual Friend*, 1864-65）はディケンズが最後に完成させた長編小説。
- ▶ あらすじ：「ギャップアー」と呼ばれるジェシー・ヘクサムは、娘のリジーとともにテムズ川から拾ったもので生計をたてている。ある日彼は一人の男性の死体を引き上げるが、それが、塵芥の山で財を成した故ハーマン氏の息子、ジョン・ハーマンだと判明する。ジョンの死により、ハーマン氏の忠実な部下だったボツフィン氏は10万ポンドの遺産を相続する。彼はジョンと結婚することになっていたベラという少女を気の毒に思い、邸に引き取ってぜいたくな暮らしをさせる。そこへ、ボツフィン氏の秘書になりたいとあってジョン・ロークスミスと名乗る青年が現れる。



チャールズ・ディケンズ



テムズ川上のリジーとギャッファー

1. ギャップファーとリジーの暮らし

- ▶ 【第1部 1章】ギャップファーがリジーにボートを漕がせ、金目のものを求めてテムズ川を探し回っているとき、彼がリジーに言うセリフ。

'How can you be so thankless to your best friend, Lizzie? The very fire that warmed you when you were a baby, was picked out of the river alongside the coal barges. The very basket that you slept in, the tide washed ashore. The very rockers that I put it upon to make a cradle of it, I cut out of a piece of wood that drifted from some ship or another.' (3)

「おめえの一番の友だちに向かってよ、そんな恩知らずの口をきいたんじゃ罰があたるだろうぜ、え、リジー？ 赤ん坊のおめえを暖めてくれた火はな、石炭運びのはしけの側で川の中からもらってきたもんだぜ。おめえが中に入って眠った寝籠だって、潮が岸へと放り上げてくれたんだぜ。そいつを乗っけて揺り籠に作った時の揺り台だって、どっかの船から流れてきた板っ端で作ってやったんだぜ。」（上 15）

⇒ 彼らは川から拾ってきたものを「リサイクル」して生活している。

2. 故ハーマン氏の遺産

- ▶ 【第1部 2章】 弁護士のもティマー・ライトウッドが、故ハーマン氏が築いた財産について説明する場面

By which means, or by others, he grew rich as a Dust Contractor, and lived in a hollow in a hilly country entirely composed of Dust. On his own small estate the growling old vagabond threw up his own mountain range, like an old volcano, and its geological formation was Dust. Coal-dust, vegetable-dust, bone-dust, crockery-dust, rough dust, and sifted dust—all manner of Dust. (13)

さてこの商売で、あるいはそれ以外の手口で、彼は塵芥処理請負業者として大金持ちになり、まったく塵芥だけの丘が連なる国の谷間に住んでたんです。このがみがみ爺いのろくでなしが、わずかばかりの自分の土地に手製の塵芥山脈を盛り上げましてね。ま、古い火山が聳え立つといった図ですな。その山々の地質学的構成要素はすべてこれ塵芥質、石炭かすに野菜くず、骨あり、瀬戸かけあり、粗塵芥あり、仕分け塵芥あり、ありとあらゆる種類の塵芥で出来ていたわけです。（上 33-34）

⇒ ハーマン氏の職業は Dust Contractor だった

3. ボッフィン氏による遺産の相続

- ▶ 【第1部 8章】 ライトウッドが、ハーマン氏の部下だったボッフィン氏に、彼がハーマン氏の遺産10万ポンドを相続したことを説明する場面

And what is particularly eligible in the property, Mr. Boffin, is, that it involves no trouble. There are no estates to manage, no rents to return so much per cent. upon in bad times [. . .], no agents to take the cream off the milk before it comes to table. You could put the whole in a cash-box to-morrow morning, and take it with you to—say, to the Rocky Mountains. (88)

そしてこの財産のとくにありがたい点は、これになんらの面倒も付随していないということです。管理が必要な地所があるというんじゃないし、不景気が来れば何パーセントか返すことになる地代が含まれてるわけじゃないし〔中略〕、利益が懐に入る途中で代理人にうまい汁を吸われることもないんですからねえ。明日の朝にでもその財産を全部金庫につめ込んで、どこのどんなところへでも持って行ける——ロッキー山脈の山の中へでもね。（上 177）

⇒ 遺産は10万ポンドの現金（計算方法によるが65～80億円）

4. ヴィクトリア時代英国の塵芥の山 (1)



E. H. ディクソンによる1837年の水彩画。ロンドンのキングズ・クロスにあった巨大な塵芥の山を描いたもの。(Vintagehetty)

4. ヴィクトリア時代英国の塵芥の山 (2)

- ▶ 前のスライドの水彩画には下に手書きのコメントが加えられている。

It tells us that this is a 'View of the Great Dustheap, King's Cross, Battle Bridge. 1837, from the Maiden Lane (the present York Road) it was removed in 1848 to assist in rebuilding the City of Moscow, Russia.' This provides a clue to the commercial value of the dust mound, which, comprised largely of fine cinders and ash, was sold on as material for the manufacturing of bricks (in this case, exported to Russia) as well as to farmers for manure. (Vintagehetty)

コメントはこれが「メイデン小路（現在のヨーク通り）から見た、バトルブリッジのキングズ・クロスにあった巨大なゴミ山で、ロシアのモスクワ市の再建を支援するため1848年に撤去された」と述べている。これはゴミ山の商業的価値についての手がかりとなる。主として消し炭や灰から構成されたゴミ山は、レンガを作る原料として売却され（この場合はロシアに輸出され）、また肥料の材料として農夫に売られたのである。

⇒ 塵芥はレンガや肥料の原料として輸出されることさえあった

5. ヴィクトリア時代のロンドンの地図



キングズ・クロスはロンドン北部で、当時としては郊外。『我らが共通の友』の登場人物の多くがこのエリアの住人。

6. Dust Contractor という職業 (1)

- ▶ ヘンリー・メイヒュー『ロンドンの労働者とロンドンの貧民』(1851)における Dust Contractor に関する記述

Not many years ago it was the practice for the various master dustmen to send in their tenders to the vestry, [. . .] offering to pay a considerable sum yearly to the parish authorities for liberty to collect the dust from the several houses. The sum formerly paid to the parish of Shadwell, for instance, though not a very extensive one, amounted to between 400l. or 500l. per annum; (Mayhew 194)

それほど遠くない昔、さまざまな清掃業の親方たちにとって、教区会において入札を行い、〔中略〕何軒かの住居からゴミを集める権利を得るために毎年ある程度の額を教区当局に納めることを申し出るのは普通のことだった。たとえば、かつてシャドウェルの教区に納入されていた額は、それほど広い教区ではないが、年に総計400～500ポンドになった。

⇒ かつて、家々から廃棄物を集めるのは「権利」であり、その権利を得るために入札が行われた。

6. Dust Contractor という職業 (2)

- ▶ メイヒューの著書には、Dust Contractor の「稼ぎ」について次のように記されている。

but then there was an immense demand for the article, and the contractors were unable to furnish a sufficient supply from London; ships were frequently freighted with it from other parts, especially from Newcastle and the northern ports, and at that time it formed an article of considerable international commerce—the price being from 15s. to 1l. per chaldron. (Mayhew 194)

しかしその品物には莫大な需要があったため、請負業者たちはロンドンだけでは十分な量を供給することができなかった。船舶にはしばしば他の地域、とくにニューカッスルなど北部の港湾からの品物が積み込まれた。そして当時、それは国際通商のかなり重要な部門を構成しており、1チョルドロン（約1,300リットル）あたり15シリングから1ポンドの値がついた。

⇒ 塵芥は国際貿易の重要な商品であり、Dust Contractor たちに莫大な利益をもたらした。

7. 塵芥を「仕分ける」仕事 (1)

- ▶ 塵芥の山には雑多な物品が含まれており、それぞれ異なる相手に販売され、異なる目的で使われた。
 1. 土壌、もしくは細かな塵 → レンガの材料としてレンガ業者に、もしくは肥料として農夫（とくにクローバー農家）に販売。
 2. 消し炭 → レンガ焼成のためレンガ業者に販売。
 3. 古布、骨、古い金属片 → 船舶用品業者に販売。
 4. 錫や鉄の古い器 → トランクなどの留金など、金属製品を作るために販売。
 5. 古いレンガや牡蠣殻 → 建物の基礎にするため、または道路工事のために建設業者に販売。
 6. 古いブーツや靴 → プルシアンブルー（顔料）製造業者に販売。
 7. 貨幣や宝石 → 自分でとっておくか、ユダヤ人に販売。（Mayhew 195）
- ⇒ このように使用目的が多種多様であるため、塵芥を仕分ける業務が非常に重要になった。

7. 塵芥を「仕分ける」仕事 (2)

- ▶ 塵芥の山では sifter と呼ばれる労働者たち（多くは女性）がたいへん劣悪な条件で働かされていた。

In the process of their work they pushed the sieve from them and drew it back again with apparent violence, striking it against the outer leathern apron with such force that it produced each time a hollow sound, like a blow on the tenor drum. All the women present were middle aged, with the exception of one who was very old—68 years of age she told me—and had been at the business from a girl. (Mayhew 197)

作業をするにあたって彼女たちはふるいを前に押し出し、それをまた猛烈な勢いで引寄せ、外側の革のエプロンに強く打ちつけるので、その度にテナードラムのようなうつろな音が響いた。その場にいた女性たちはほとんど中年だったが、1人だけはたいへん年とっており——68歳だと本人は言っていた——少女時代からこの仕事をしているとのことだった。

⇒ 塵芥をふるいにかけることによって使えそうなものを選び分ける女性たち

8. 塵芥の山で働く女性たち



メイヒューの著書の挿絵 “View of a Dust Yard” (Mayhew 197)

9. 作品中で言及される塵芥の仕分け

- ▶ 【第4部 14章】 ボッフィン氏の財産を狙うサイラス・ウェッグが、塵芥の山から金目のものが出てきはしないかを見張っている場面

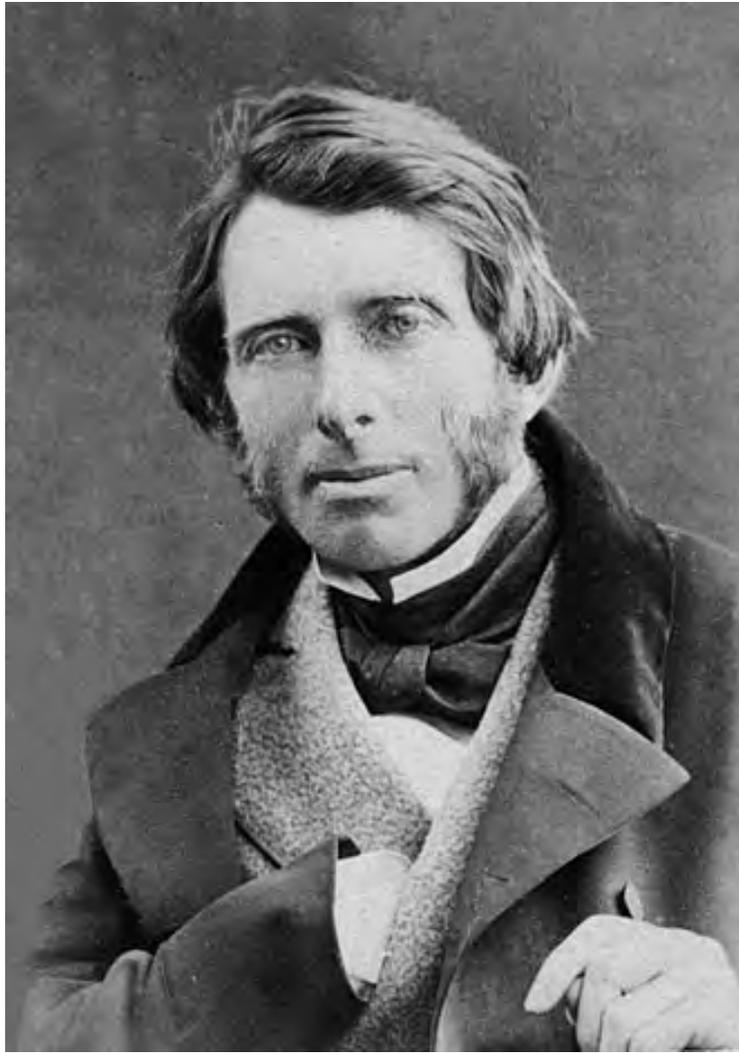
But eyes no less rapacious had watched the growth of the Mounds in years bygone, and had vigilantly sifted the dust of which they were composed. No valuables turned up. How should there be any, seeing that the old hard jailer of Harmony Jail had coined every waif and stray into money long before? (779)

しかし昔この山ができる時に、彼に劣らぬ貪欲な目が注がれていて、山と積まれたその塵芥はすでに鶺鴒の目鷹の目で篩にかけられていたのだった。値打ちのある物など何ひとつ出て来はしなかった。遠い昔に、ガリガリの先代ハーマン氏、別名ハーマン監獄の牢番が、金になるほどのものならどんな屑でもがらくたでも、すべて金に換えてしまったことを思えば、金目のものが出てきたりしたらそれこそ不思議というものだろう。（下 399-400）

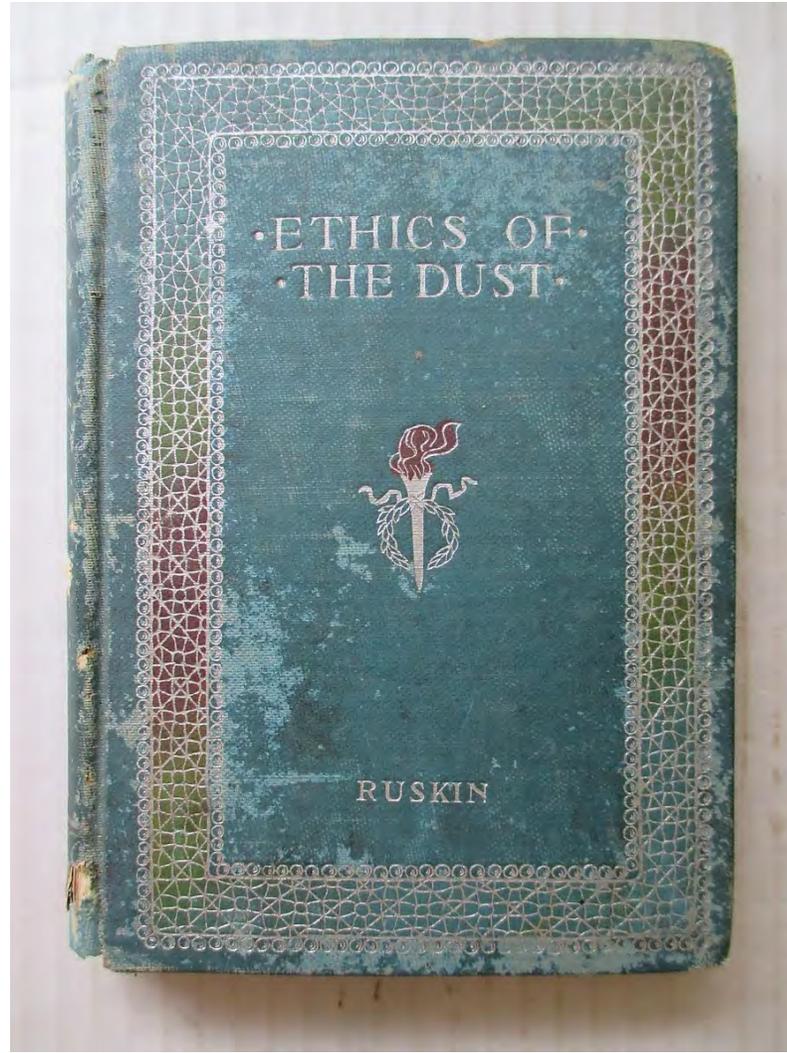
⇒ 『我らが共通の友』では仕分け作業そのものは描かれませんが、先代ハーマン氏の存命中に前のスライドのイラストのような作業が行われていたと考えられる。

10. ジョン・ラスキン『塵の倫理学』

- ▶ ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) : ヴィクトリア時代イギリスの評論家、社会思想家。ラファエル前派などの画家と交友があり『近代画家論』を著した。教育についても関心が高く、女性教育論「女王の花園」を収めた著作『胡麻と百合』でも知られる。
- ▶ 『塵の倫理学』 (*The Ethics of the Dust*, 1865) : 教師を務めていたウィントン・ホールという女子校の生徒たちを相手にした、架空の対話からなる教育書。ラスキン自身は老講師 (Old Lecturer) として登場する。
- ▶ 表向きは鉱物の結晶化や岩石の風化と再構成など、地質学的な題材について語っているが、じつは自分を自分として構成するのに必要な内なる力や、艱難に耐えて成長をめざすことの大切さなど、倫理的メッセージを伝えようとしている。



ジョン・ラスキン (1863年)



『塵の倫理学』 (1895年版)

11. ヴィクトリア朝英国における dust

- ▶ ヴィクトリア時代の英国において、dust は宗教的・文化的に複雑なイメージを呼び起こす概念だった。

Intensifying its negative cultural associations, Ruskin's Evangelical faith endowed dust with a gloomy significance: dust is proof of humanity's corruption and God's punishment as pronounced in Genesis 3:19. [. . .] the Biblical formulation of "dust to dust" continued to give Ruskin his essential coordinates: dust describes the fate of material existence (decay) and the form that fate takes (the molecular). (Mershon 467)

そのネガティブな文化的イメージをさらに強化する形で、ラスキンの福音主義的信仰は dust に陰鬱な意味を付与した。dust は創世記3:19で言明されているように、人類の墮落と神の罰の証左であり、〔中略〕「塵は塵に」という聖書の記述はラスキンに絶対的な座標を与えた。dust は物質的存在の宿命（腐食・腐敗）と、その宿命がもたらす様相（分子化）を具象化するものだった。

⇒ dust は形あるものの腐食・腐敗（decay）の象徴

12. 人間の中で起きている decay

- ▶ 『塵の倫理学』の老講師は少女たちに、自分の皮膚が透明だったらどんなことになるか想像してごらん、と語りかける。

L. It would not at all be good for you, for instance, whenever you were washing your faces, and braiding your hair, to be thinking of the shapes of the jawbones, and of the cartilage of the nose, and of the jagged sutures of the scalp?

(Resolutely whispered "No's.")

L. Still less, to see through a clear glass the daily processes of nourishment and decay? (Mershon 467-68)

たとえば、君たちが顔を洗っているときや髪を編んでいるときに、下顎骨や鼻の軟骨、頭蓋骨のギザギザの継ぎ目なんかの形をいつも気にしているとしたら、少しもいいことはないだろう。

(きっぱりとした「嫌」というささやき)

透明なガラスを通して、日々食べたものの消化・吸収のプロセスが見えたとしたらもっと嫌だろう。

⇒ decay は自然界だけでなく、人間の身体の中で起きており、それによって人は生きていることに目を向けさせる。

13. 「dust のように振舞え」という教え

- ▶ 老講師は少女たちに「つねに少なくとも dust のように振舞いなさい」（Always behave at least as well as dust）と説く。

Ultimately, dust's ethical value inheres in matter's susceptibility—its vulnerability to the erosive effects of wind and water; [. . .] To behave as well as the dust is, thus, to emulate the patient suffering of the elements of the earth, which “must passively wait the appointed time of their repose, or their restoration” (Mershon 471)

究極的には、dust の倫理的な意義は物質の感受性に——風や水の浸食作用に対するその脆弱さにある。〔中略〕 dust のように振舞うということは、すなわち、辛抱強く苦難に耐え、いつの日か訪れる休息、あるいは再生のときを待たねばならない大地の諸元素を模倣するということなのである。

⇒ 岩石が浸食を受けて細かな dust になり、それがまた新たな物質を構成するプロセスを、苦境に陥りながらもそれを乗り越えて新たな自己を獲得する人の歩みに重ね合わせている。

14. 『我らが共通の友』に描かれる dust としての人間 (1)

- ▶ 【第1部 1章】ギャッファーが元相棒のロジャー・ライダーフッドに向かって啖呵を切るセリフ。

Has a dead man any use for money? Is it possible for a dead man to have money? What world does a dead man belong to? T'other world. What world does money belong to? This world. How can money be a corpse's? Can a corpse own it, want it, spend it, claim it, miss it? (4)

死人が銭になんの用がある？ 死人が銭を持つなんてことはありっこねえんだ！ 死人は、あの世とこの世と、どっちの世界にいるんだ？ あの世にきまってらあな。銭はどっちの世界のもんだ？ この世のものさ。銭が死体の持物なんかでたまるもんか！ 死体が銭を持ったり、銭を欲しがったり、銭を使ったり、その銭はおれのもんだとか、銭がねえぞ、とか言うわけがあるかよ！（上 17-18）

⇒ ギャッファーの“本業”は、テムズ川から引き揚げた死体から金銭をくすねること。

14. 『我らが共通の友』に描かれる dust としての人間 (2)

- ▶ 【第1部 7章】剥製や骨格標本を製作する職人のヴィナスが、ウェッグに人間の骨格標本の作り方について説明する。

When I prepare a miscellaneous one, I know beforehand that I can't keep to nature, and be miscellaneous with ribs, because every man has his own ribs, and no other man's will go with them; but elseways I can be miscellaneous. I have just sent home a Beauty—a perfect Beauty—to a school of art. One leg Belgian, one leg English, and the pickings of eight other people in it. (79-80)

よせ集めの骨で人体を組み立てる時にゃあね、肋骨だけは同じ人間のでなけりゃあ本物らしくならねえんだ。そいつは前もってわかってることさ。人間だれでも取換えのきかねえ肋骨をもってるんで、他の誰の肋骨を持ってきたって合わねえんだよ。でも他のところは寄せ集めでちゃんとやれるんだ。たった今も美しい女をな——申し分のねえ美女をさ——美術学校に送り届けたところだがね、これなんか足の一本はベルギー人、もう一本の足はイギリス人、他に八人もの骨を使ってるんだぜ。(上 160)

⇒ 人間の身体も、古布や金属片同様、選り分けられて再構成され、他の用途に使われる。

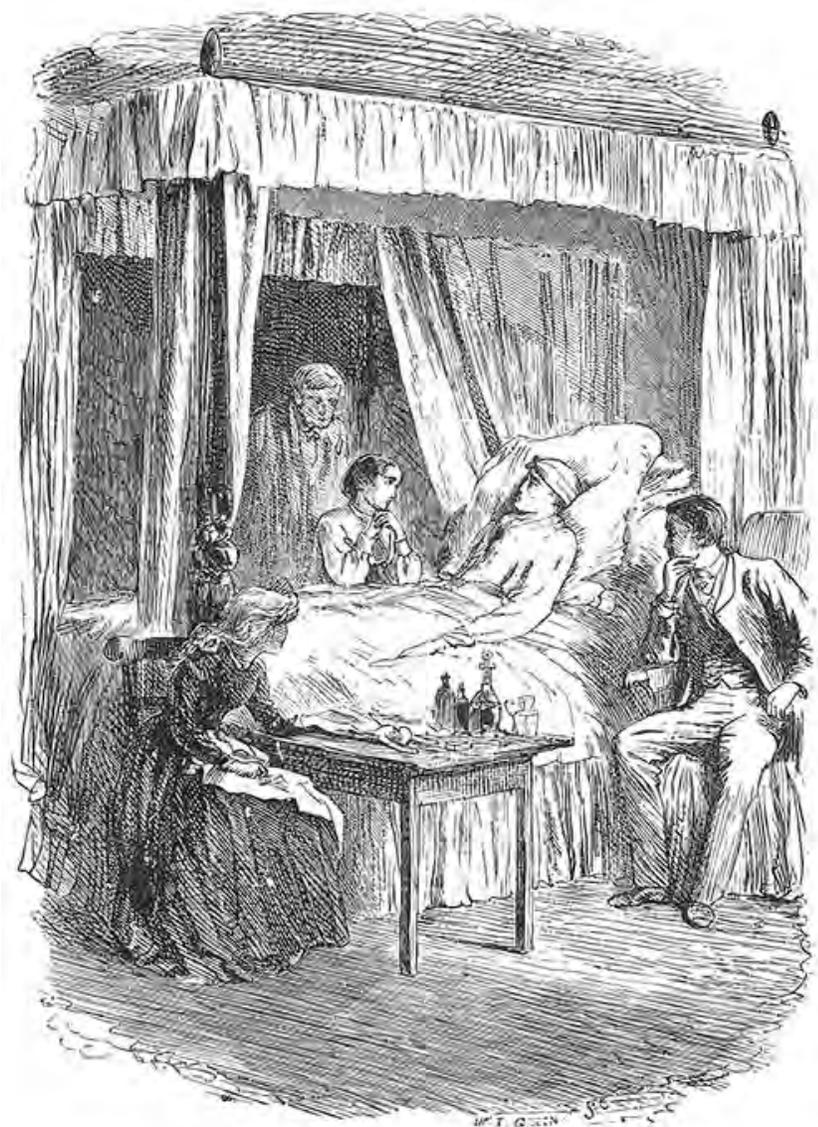
15. dust と化すことによる人間の再生 (1)

- ▶ 【第4部 6章】 リジーに思いを寄せる青年、ユージン・レイバーンは、恋敵のブラドリー・ヘッドストーンに襲われ、川に投げ込まれる。

Now, merciful Heaven be thanked for that old time, enabling me, without a wasted moment, to have got the boat afloat again, and to row back against the stream! And grant, O Blessed Lord God, that through poor me he may be raised from death, and preserved to some one else to whom he may be dear one day, though never dearer than to me! (701)

ああお恵み深い神様、ありがとうございます——昔のあの日々のおかげで、今こうして一瞬の無駄もなくまたボートを押し出すことができましたし、こうして流れにさからって漕いでいくことができます！ ああどうぞ神様、力弱いこの娘をお使いになって、この方を死から蘇らせてください、そしてやがてこの方をいとしく思うどなたかのために生き延びさせてくださいませ——その方の愛情がわたしのこの気持ちには遠く及ばないにしても！（下253）

⇒ ボートを操ってユージンを川から救うリジーの行為は、父ギャッファアの“本業”に重なる



病床のユージンに寄り添うリジー



ヴィナスの工房

15. dust と化すことによる人間の再生 (2)

- ▶ 【第4部 16章】 瀕死の床でリジーと結婚したユージンが、回復した後、親友のモティマーに心境を語る場面

Therefore, I will fight it out to the last gasp, with her and for her, here in the open field. When I hide her, or strike for her, faintheartedly, in a hole or a corner, do you, whom I love next best upon earth, tell me what I shall most righteously deserve to be told:—that she would have done well to have turned me over with her foot that night when I lay bleeding to death, and to have spat in my dastard face. (813)

したがって僕は、このルールなき戦いの場で、妻とともに、妻のために最後の最後まで戦い抜くつもりなんだ。僕が彼女を世間から隠したり、彼女のために戦うにしても穴に隠れて及び腰で戦うようなら、世界中で僕が二番目に愛している君よ、僕に言ってくれたまえ、僕が当然受けるべき言葉をね——おまえが出血多量で死にかけていたあの時に、彼女は足でお前をひっくり返し、おまえの腰抜け面に唾をひっかけた方がよかったんだ、とね。(下 465)

⇒ 何ごとにも真剣になれなかったユージンは、dust として川に投げ込まれ、拾い上げられることで新たな人間となる。

まとめ — ヴィクトリア朝英国のSDGs

- ▶ ヴィクトリア時代、とくにその前半において、イギリスでは廃棄物の分別、再利用、再資源化が徹底的に行われていた。
- ▶ それはビッグビジネスとなり、廃棄物処理を請負う Dust Contractor として莫大な財を成す者も現れた。ディケンズは『我らが共通の友』でそのような状況をリアルに描いている。
- ▶ 廃棄物すなわち dust は、経済的な意味にとどまらず、物質が侵食や腐食によって分解され、それが新たな物質を構成する原料となる自然の循環、さらには困難な状況に耐えて成長し、新たな自己を獲得する人間のありようを象徴する概念として、時代の文化に深く浸透した。
- ▶ 人間はものをリサイクルする立場ではなく、リサイクルされる dust であって、自然の循環の一部であるという認識が生まれた。



ナショナルトラストなど、環境保護のための活動につながる

【参考文献】

Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. 1864-65. Edited with an Introduction and Notes by Michael Cotsell, Oxford University Press, 1998.

ディケンズ, C., 間二郎〈訳〉, 『我らが共通の友〈上〉』, 筑摩書房 (ちくま文庫), 1997年.

——, 『我らが共通の友〈中〉』, 筑摩書房 (ちくま文庫), 1997年.

——, 『我らが共通の友〈下〉』, 筑摩書房 (ちくま文庫), 1997年.

Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor (A Selected Edition)*. Edited by Robert Douglas-Fairhurst, Oxford University Press, 2010.

Mershon, Ella. "Ruskin's Dust." *Victorian Studies* 58(3): 464-492, 2016.

Vintagehetty. "Ashes to Cashes: The Value of Dust." *Dickens Our Mutual Friend Reading Project* 2014.07.17.

<https://dickensourmutualfriend.wordpress.com/2014/07/17/ashes-to-cashes-the-value-of-dust/comment-page-1/>